

もうねむっていることでしょう。それにダイオさんだって、ただパートナーとねるだけで、すぐ朝になってしまいます。

いつから、こんなふうになってしまったんだろう。

ひとりむすめのマミちゃんを、山にかこまれた、たんぼやナシ畑なしはたけのある、このしずかな町でそだてたくて、小さな家を買ったのです。でもそのために、もっともっと、仕事にせいをださなければいけなくなりました。これでは、いっしょにさんぼに行く時間もありません。

ふみきりをわたって左にまがり、ダイオさんは、コンビニのよこの坂道さかみちを、のぼって行きました。つかれたからだに、坂道がこたえます。あとすこし、がんばれ、がんばれ！

心の中でかけ声をかけながら、ようやく、坂道をのぼりました。

ひと息いそぎついてふと顔をあげると、電信柱でんしんばしらに、なにか見なれない、かんばんみたいなものがとりつけられているのに、気がつきませんでした。

電気もついていないのに、なんだかそこだけが、大きく、うきあがったように白く見えます。

ダイオさんは、ちかづいてみました。

紙のようなうすい木の皮かわに、草のしるでもしぼって、書いたのでしょうか。大人おとなが書いたとは思え

